



キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第22回

森本あんり

もりもと あんり
国際基督教大学教授

自己実現と献身

新しい年を迎えて祈ります。「キリスト者として生きる」わたしたちの人生が、この年も満ち足りたものでありますように。そして、それが人の役にたつものでありますように。さて、いきなり問題です。この二つのお祈りは、矛盾しているでしょうか。自分の人生が豊かで満ち足りたものであることと、それが他者のために役だつものであること。実は、

これは二つで一つの祈りなのです。

人間は、ただ生きていけば満足できる、という動物ではありません。生死の境をさまよった直後ならともかく、誰でも生き続けているれば、自分の人生に何らかの意味があることを実感したい、と思うものです。ただ毎日食って寝るだけでなく、何かしら自分を生かしたい、自己実現を図りたいのです。いや、そんな小難しい言葉を使う必要はありません。でも、「生きがい」のある人生、というのはそういうことです。

ところが、ここにやっかいな点があります。人間の自己実現は、自然やモノとの関係ではなく、人格を持った他者との交わりの中での成就しないのです。つまりわたしたちは、他者の生の中に自己の生を実現したい、と思うのです。簡単に言うと、「自分をもっとも輝いている」と思えるのは、「誰かのために生きている」と実感できる瞬間なのです。

誰も、自分が何の役にもたない無用な人間であるとは思いたくありません。斜に構えてシニカルなポーズをとる青年も、実は「誰かの役にたちたい」という秘かな思いをもっています。必ずしも社会や国家のために、などと大段に構える必要はありません。ひとりの人を愛するためだけに生きる、というのだったいいのです。逆に、外から見て何一つ不足のない暮らしに見えても、そういう実感をもてない人は、退屈で不機嫌で不幸です。

みなさんは、「干し草小屋」の誓いをご存じですか。今からちょうど二〇〇年前のある夏の日、ウィリアムズ大学の五人の学生たちが野原で雷雨に遭い、とある干し草小屋に雨宿りをしました。そこで祈りつつ語り合ううちに、彼らは海外宣教への志を強め、やがて米国初の海外宣教団体「アメリカン・ボード」が生まれたのです。昨年の九月には、同大学でその二〇〇周年記念式がありました。

人間の自己実現は、自然やモノとの関係ではなく、人格を持った他者との交わりの中でしか成就しないのです。つまりわたしたちは、他者の生の中に自己の生を実現したい、と思うのです。簡単に言うと、「自分もつとも輝いている」と思えるのは、「誰かのために生きている」と実感できる瞬間なのです。

「アメリカン・ボード」は、その後世界中に数多くの宣教師を送り出します。日本にもグリーン夫妻をはじめとする多くの働き人が送られ、その働きに助けられて組合教会、神戸女学院、同志社、松山東雲学園（しんどのがくえん）などが設立され発展してゆきました。

送られた宣教師たちは、もちろん信仰深い人々だったことでしょう。けれども、それだけではなかったと思います。十九世紀のアメリカは、各地に次々と大学が建てられた時代です。若者たちはそこで高等教育を受けると同時に、その受けた教育をどのようにして社会へ還元するかについても考えさせられました。それで、大学を卒業した当時のエリート青年たちは、「とにかく誰かの役にたちたい」

というやみくもな献身意欲に燃えていたのです。

海外宣教は、何を隠そう、そういう彼らにとって絶好の自己実現の場でありました。どうせなら、もつとも困難で、もつともやりがいがあつて、もつとも求められて感謝されるようなことにチャレンジしたい。つまり、今風に言えば、冒険心あふれる「ボランティア」のはしりです。海外ワークキャンプの原型です。見知らぬ東洋の国に行って、言葉もわからぬ人々のために働くなんて、いかにも心躍る大冒険ではありませんか。

こんな風に言うと、献身的に尽くした宣教師たちに失礼ではないか、と怒り出す人もあるかもしれません。まるで彼らが「自分探

し」のついでにやってきた「高級寅さん」みたいに聞こえてしまうからです。けれども、組織上の名目ではなく、十九世紀の若者であった彼らの目線から、その志のはじまりを考えてみると、これはけっしてはずれではないと思います。だから彼らの仕事は、伝道に直接たずさわるよりも、教育や医療を通しての間接的な伝道の方が多かったのです。「宣教師」という肩書きは、その彼らの献身意欲に形を与える容れ物でありました。

「他者のために生きる」なんて言うと、いかにも自己犠牲的で、しかも面をした苦しい人生みたいに聞こえます。けれども、それだけではけっして長続きしません。日本のキリスト教界に大きな貢献をしてくれた宣教師たちの永年の働きも、「滅私奉公」だけでは自分の喜びがあつてこそ可能だったでしょう。

ここに、自己実現と他者への献身のパラドックスがあります。主イエスが言われたとおり、「自分のために宝を積む」だけでは、結局わたしたちは幸福にも豊かにもなれないのです。

もう一度祈りましょう。新しい年も、わたしたちの人生が満ち足りたものでありますように。そしてそれが、人の役にたつものでありますように。